

[原著論文]

## 構文の他動性に関する認知分析

—中日言語対照の立場で—

黄 春玉<sup>\*,\*\*</sup>

## A Construction Grammar to Chinese and Japanese transitivity

Chun yu HUANG<sup>\*,\*\*</sup>

### Abstract

This article explores the transitivity of Chinese and Japanese from the perspective of construction grammar. The transitivity of Chinese and Japanese differ but in both languages, the constructional meanings are extendable. Existential sentences can be extended to possessive sentences, and possessive sentences can be extended to transitive sentences. The sentence elements are also extendable, and this extension interacts with constructional meaning. The route of meaning extension is usually from concrete to abstract, from dynamic to static, from cause to result. Constructional meaning constrains its constituent elements, for example, existential sentence constrains quantifiers and adverbial elements, while static sentence constrains the agent. In the construction, the meaning of the constituent elements can achieve the meaning extension from transitivity to automatism.

**KEY WORDS :** Construction, transitivity, semantic extension, comparison of Chinese and Japanese

---

\* 上海海洋大学外国語学院  
\*\* 九州共立大学

\* Foreign Language College, Shanghai Ocean University  
\*\* Kyushu Kyoritsu University

## 1. はじめに

構文文法理論は前世紀の80年代から始まり、認知言語学理論を基にして発展してきた言語の研究方法である。その代表としてはLakoff, Fillmore, Goldbergが挙げられる。

構文文法を中国語の文法研究に用いて、陸俊明(2004:412)<sup>1)</sup>では“张三打了李四”と“一锅饭吃了十个人”という例を挙げて次のように説明した。すなわち、“张三打了李四”は述語動詞を中心とする動詞文であり、文中の意味関係は“施—動—受”である。これに対し、“一锅饭吃了十个人”は関係構造を表す動詞文であり、文中の意味関係は“容纳量—容纳方式—被容纳量”(納まる量—納め方—納められる量)である。この二つの例文を異なる構文と見て解釈するのは説得力があると考えられる。そうでなければ、“一锅饭”は動詞“吃”の仕手となって、結果的に“饭吃人”となってしまう、通じない文となるのである。構文文法は辞書の意味が説明できない意味を説明することができる。例えば、“吃”の意味は“動作主将食物放到口中经过咀嚼咽下去”(仕手が食物を口の中に入れ、嚙んで飲み込む)である。しかし、この表現の中においては“容纳方式”「納め方」を表す。上の解釈から、構文の意味は述語動詞の意味を左右することが分かり、同時に構文文法は動詞の他動性に深く関わっていることが分かる。例えば“张三打了李四”は他動詞文と見なされるが、“一锅饭吃了十个人”は関係を表す文であり、自動性の表現と見なされる。この文では“吃”は他動詞であるが、構文全体は自動性を表すことから、構文は動詞“吃”に自動性の意味を与え、いわゆる“构式赋义”(構文が動詞に意味を付与する)である。したがって、構文は文成分の意味に影響を与えることができる。

構文と他動性の関係において中国語と日本語は異なる様相が見られる。例えば、中国語の“会议开始了”といったような〈SV〉構造は自動性表現であるが、“她们开始开会了”といったような〈SVO〉構造は他動性表現である。動詞は自動性を表すかそれとも他動性を表すかは構文によって決める。しかし日本語は膠着語として格助詞が重要な役割を果たす。例えば自動性を表す「会議が開始した」は必ず「が」が用いられるが、他動詞文「会議を開始した」は「を」を使わなければならない。また、“太郎张着嘴”のような表現は日本語に「太郎は口を開けている」「太郎は口が開いている」「太郎は口を開いている」の三通りの訳をすることが

できる。このことから、“太郎张着嘴”意味的に三通りの解釈が可能であることが分かる。その一、太郎は意図的に口を開け、他動性的意味がとらえられる。その二、太郎は口を開ける状態にあり、自動性の表現である。その三、太郎は口を開ける状態を保ち続けており、自動性と他動性の連続性が表されている。これらの問題について本稿は構文文法に基づいて中国語と日本語を対照する立場で構文の他動性を考察していく。

## 2. 意味拡張のルートと構文の意味拡張

### 2.1. 意味拡張のルート

意味拡張は人類の言語生活に普遍的に存在している。語彙レベルだけではなく、フレーズ、構文等のレベルにも意味拡張が見られる。そして、構文レベルにおいて意味拡張は意味的機能の拡張となるのである。

意味拡張は概念の繋がりに基づくのである。この繋がりはイメージ的類似性と空間的隣接性に拠るものである。例えば、きれいな女性を比喻して言うとき「彼女は花のようだ」という言い方をする。花は美しい象徴であり、類似性に基づく比喻である。認知言語学ではメタファーと言う。また、「ホワイトハウスの方針が変わった」のような例では「ホワイトハウス」はアメリカ政府を例えて言う。これは隣接性に基づく比喻であり、「メトニミー」である。メタファーとメトニミーは意味拡張の基本的メカニズムである。意味拡張は認知言語学の一現象として認知の規則に合わなければならない。人間は世界に対する認識は時間的先後があり、空間的に遠近がある。この先後遠近は人間が物事を表す基本的順序となる。動態と静態は時間の流れから見れば「開始→持続→完了(変化)→結果」のいくつかの段階に分けることができる。そのうち、「開始、持続、完了」は動態に属し、「結果」は動作完了後の状態を表し、静態に属する。このことから意味拡張のルートは「動態→静態」だと考えられる。「太郎は前歯を折った」は主体の「前歯が折れている」という状態を表し、静態の表現である。しかし、「SOを折る」は通常動作を表す表現であり、ここでは動態表現から静態表現に拡張すると考えられる。また、「車が走る」は動態表現であるが、「山脈が走る」は静態表現である。ここもやはり動態から静態に拡張すると考えられる。原因と結果は時間的に見れば原因が先であり、結果が後である。ゆえに意味拡張のルートは「原因→結果」となるのである。この因果の先後は中国語の動補構造に顕著に現れている。例えば、“杀死, 打碎,

哭哑, 洗干净”等. 中国語動詞の意味拡張も「動作→結果」となる. 例えば, “杀, 打”のプロトタイプの意味は動作を表すものであるが, “气杀, 碗打”のような表現では程度と状態を表す. 具体と抽象は空間的立場から見れば人間が事物に対する認識は身近な具体的な事物から始まるのである. 具体的な事物は目に見えるし, 触ることもできる. これに対し, 抽象的な事物は目に見えないし, 手が届かない. ゆえに, 「具体」はわれわれに近く, 「抽象」はわれわれに遠い. 「具体→抽象」も意味拡張の一つのルートである. 例えば, 「商品を買う→努力を買う」のような表現は「具体→抽象」の意味拡張を表す.

他動性と自動性は連続しており, これは他動性の定義から見てとれる. ヤコブセン (1989: 216)<sup>2)</sup>によれば「他動詞的述語とは, ある対象に知覚可能な変化を起こすべく, ある動作主が意図的かつ直接的にその対象に働きかける, という意味を表すものである」. 他動性に原型的な意味があるとすれば, 周辺的な意味もあると考えられる. つまり, 他動性的意味は周辺へ拡張し, 自動性へと拡張すると考えられる. また, Hopper and Thompson (1980: 252)<sup>3)</sup>は他動性には程度があり, その程度に影響する10個のパラメーターは以下となる. A参加者 (participants), B動作性 (kinesis), Cアスペクト (aspect), D時間的限界性 (punctuality), E意志性 (volitionality), F肯定性 (affirmation), Gムード (mode), H動作主性 (agency), I対象への影響性 (affectedness of object), J対象の個別化 (individuation of object)”. 先行研究から分かるように, 他動性は絶対的な概念ではなく, 自動性と連続している概念である. 他動性と自動性の連続性は次の例から窺い知ることができる.

(1) 花子はきれいな和服を着ている.

例 (1) は動作を行う最中を表すとすれば, この文は他動性の表現であると考えられる. 逆に, 例 (1) は動作完了後の状態を表すとすれば, この文は自動性の表現であると考えられる. すなわち, 例 (1) は自動性も表せば, 他動性も表すのである. このことから他動性と自動性は連続していることが分かる. 同時に「他動性→自動性」の意味拡張が実現できる. 次の例も同様である.

(2) 太郎は布団をかけている.

(3) 太郎は口を開けている.

(4) 太郎は注射した.

例 (2) は太郎が他人に布団をかけると他動性的に理解することもできるが, 太郎自分が布団をかけてい

る状態であると自動性的にとらえることもできる. 例 (3) は太郎が他人の口を開けたというふうに他動性的な理解があれば, 太郎自分が口を開いていると自動性的な理解もありうる. 例 (4) は太郎は他人に注射すると理解できる一方, 太郎自分が注射されたと理解できる. これらの例から他動性と自動性が連続していることが分かり, そして, 〈動態→静態〉〈原因→結果〉〈具体→抽象〉〈他動性→自動性〉は意味拡張のルートであることが分かる.

## 2.2. 構文の意味拡張

### 2.2.1. 中国語の構文の意味拡張

構文文法の理論によると, 構文は言語の一カテゴリーとして意味拡張がありうる. 任鷹 (2009: 309)<sup>4)</sup>は“典型的存現句句首的空间词语被类推为有生名词, 存现句就会变为领属句, 后者其实是前者的扩展” (典型的な存現文の文頭の場所名詞が有生名詞に類推される場合, 存現文は領属文になり, 後者は前者から拡張してきたものである) と指摘している. つまり, 存現文は領属文に拡張できる. 存現文は領属文と密接な関係にあり, 連続している. 中国語の“孩子哭哑了嗓子”のような主語と目的語が領属関係にある表現は存現文または領属文と見なすことができ, 自動的な表現だと考えられる. このような主語の位置にある名詞が人間である文は動作性を表すか, それとも状態性を表すか判断しきれない場合がある. これに対し“山崖下摔死了个孩子”のような主語の位置にある名詞が場所名詞である文は存現文であることが明らかである. 構文から見れば上述の例文は〈SVO〉構文であるが, 構文の意味から見れば文中の主語等の文成分が変わるに伴って構文の意味も変わる. これはつまり構文と文成分が意味的に影響しあうということである. このように影響しあうことは意味拡張にも現れる. 例えば“村子里盖好了房子”と“他盖好了房子”を比べて見ると, “村子里盖好了房子”は存現文で自動性の表現である. “他盖好了房子”は二通りの解釈が可能である. その一つは彼は直接家を建てる行為をしておらず, その結果を受けるのみであり, 家の所属者である. いま一つは彼は自ら家を建てる行為をしたということである. 前者は彼が家の所有者であり, 領属文と見なされるが, 後者は他動詞文である. つまり, “s+盖好了房子”は主語“s”の意味変化に伴い, 文の意味が〈存在→領属→他動〉のように変わる. したがって, 構文の意味が拡張することができる. そして, この拡張は文成分の意味と互いに影響しあうのである.

### 2.2.2. 日本語の構文の意味拡張

日本語には領属文と他動詞文の多義的にとらえられる文がある。これを「介在性」と呼ぶ研究者がいる(佐藤2005参照)<sup>5)</sup>。次の例を見てみよう。

(5) 山田さんは家を建てた。

この文は中国語と同様、「山田さん」が動作主である場合、他動性を表すが、「山田さん」が所有者である場合、自動性を表す。この「介在性」の文は〈他動性→自動性〉あるいは〈動態→静態〉の意味拡張が行われると理解できる。

次の例は構文的には受動文ではないが、意味的には主語が動作の対象を表すため、意味的な受動文と呼ばれる。

(6) 会議が始まった。

(7) 車が止まった。

主語が対象を表す自動性表現は対応する他動詞文がある。例えば、「会議が始まった→会議を始めた」「車が止まった→車を止めた」。したがって、このような表現の背景には動作主が存在することが想定できる。次のような表現は構文的には能動文であるが、意味的には受動文である。いわゆる中間構文は背景に動作主が存在すると想定する必要はない。このような表現は主語の性質特徴を描写するものである。

(8) この茶碗はすぐ割れる。

(9) この水は飲める。

例(9)のような文を受動可能文と呼ぶ先行研究もある(寺村1982)<sup>6)</sup>。仮にそれを可能表現だととらえれば、「この水は〇〇が飲むことができる」との理解もありうる。そうすると、中間構文は可能表現に相当する。また、例えば「この動物は食べられない」と「この動物は毒があって食用できない」と「この動物は何らかの原因で物を食べることはできない」の二通りの意味がとらえられ、前者は中間構文であり、後者は可能表現である。このことから、構文の意味は連続しており、拡張することができるということが分かる。その関係は〈受動文⇔中間構文⇔可能文〉のように示すことができる。

### 3. 構文から見た中国語と日本語の他動性の違い

中国語では語順が重要な役割を果たすが、日本語では格助詞が重要な役割を担う。次の例を見てみよう。

(10) a 打了碗 → 茶碗を割った

b 碗打了 → 茶碗が割れた

(11) a 停车了 → 車を止めた

b 车停了 → 車が止まった

上の例から分かるように、中国語は位置によって自動性・他動性を表すが、日本語は格助詞「が」「を」でそれを表すのである。

類型論的立場から見れば、中国語は孤立語であり、形態変化がないが、日本語は膠着語であり、形態変化がある。このような中国語と日本語の類型上の違いは他動性にも現れる。つまり、中国語の他動性・自動性は位置や構文によって区別されるが、日本語は語尾変化や助詞や助動詞の付加によって区別される。次の例を比べてみよう。

(12) 他摆着书 → 彼は本を並べている

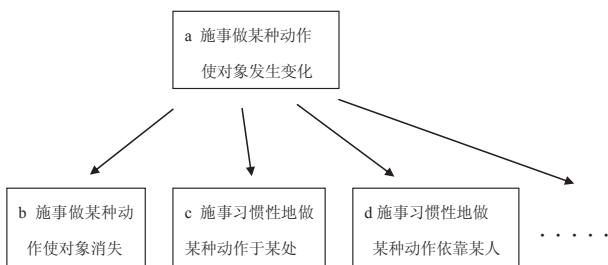
(13) 桌子上摆着书 → 机の上に本が〔並んでい  
る／並べてある／並べられている〕

例(12)“他摆着书”は〈SVO〉構造であり、「相手に変化を生じさせるべく働きかける」という意味を表す。これは典型的な他動性の表現である。例(13)は主語が場所名詞であり、「ある所にある物が存在する」という意味を表す。これは存在を表す自動性の表現である。この二つの例文の自動性・他動性の区別は動詞の形態変化から見てとることはできない。中国語とは異なり、日本語は他動性表現では格助詞は「を」を、動詞は「並べる」を用いなければならない。自動性表現では格助詞「が」を述語成分は「並ぶ」を用いて、あるいは「てある」「られる」等の補助動詞や助動詞の付加によって自動性を表す。この点における中国語と日本語の違いは構文上に形態があるかないかという点にある。例えば、“山上修着凉亭”は二つの構文を表す。一つは「ある所にある人は何かをする」という意味を表し、もう一つは「ある所にある物が存在する」という意味を表す。これを日本語で表すとそれぞれ「山の上ではあずまやを造っている」と「山の上にはあずまやが造ってある」である。つまり、構文は動態を表すかそれとも静態を表すかは「を」「が」「ている」「てある」の使用によって区別される。このことから日本語には構文を区別する形態があるが、中国語にはそれが無いということができる。ここで付け加えておきたいが形態があるかないかは一つの傾向にすぎず、(絶対的)一律的に日本語の構文は形態があり、中国語の構文は形態がないとはいえない。というのは日本語に二つの構文が形態的に区別できない例がある。例えば、「太郎は洋服を着ている」は動態を表す構文である場合もあれば、静態を表す構文である場合もある。そうとはいえ、日本語の構文の意味の連続性は主に「が、を、ている」等の助詞や補助動詞に現れている。次に構文

の連続性と意味拡張についてこの問題を検討していく。  
次の例を見てみよう。

- (14) a他吃饭  
b他吃了一个团  
c他吃食堂  
d他吃父母  
.....

(14a) (14b) は他動性構文であり, (14c) (14d) は“他”の飲食習慣と生活習慣を表し, 自動性構文である。このような例はまだたくさんある。これらの構文の拡張は以下のように示すことができる。



(14) から分かるように, 構文の意味拡張は〈SVO〉構文を基にして, VとOの意味的機能の変化に伴って拡張していく。特にOの意味機能が〈対象→場所→手段〉のように変化する場合, その拡張が明確に起こる。以上の構文の変化から中国語の構文の区別は形態変化によるものではないということが分かる。しかし, 日本語はこれと異なる。(14) を日本語に訳すと以下のようなになる。

- (14) a彼はご飯を食べる  
b彼は一個連隊をせん滅した  
c彼はいつも食堂で食べている  
d彼は両親にたよって飯を食っている

上の例から日本語は格助詞等の明確な文法マーカーによって異なる構文を区別する。もう一つ例を見てみよう。

- (15) 王冕死了父亲。

これはよく引用される典型的な例文である。構文の種類から見れば存現文であると考えられる研究者もあれば(刘晓林2007), 領属文と見なす研究者もある(任鷹2009)。中日対照の立場から見れば, 一層明らかになるかもしれない。(15) を日本語に訳すと以下のようなになる。

- (15) a王冕は父を亡くした。  
b王冕は父に死なれた。

つまり(15) は日本語に二通りの訳し方がある。

この二通りの訳文は似ているが, 等価ではない。(15a) は通常の〈SOV〉構造であり, 主語である「王冕」が父を失ったことを表す。中国語の文法によれば, (15a) は明らかに出現や消失を表す存現文である。これに対して(15b) は「迷惑受け身」の構文である。この表現では主体「王冕」が不幸を被ることを表されている。この不幸は親を失うことによってもたらされるのである。親族の所属関係から見れば, (15b) は領属の意味を含意するといっても無理はなからう。日本語訳文から分かるように“王冕死了父亲”は多義性の構文であり, 存現文と見なすことができれば領属文と見なすこともできる。そして, この例文から分かるように中国語は一つの構文形式で二通りの意味を表すことができるが, 日本語はそれぞれ異なる構文形式を用いなければならない。

日本語には存現文という言い方はない。しかし, 「王冕は父を亡くした」のような文は“主体喪失某物”(主体が何かを失う)を表す。この意味特徴から見ればこの文を存現文と呼んでも差し支えないだろう。「太郎はチャンスを逃した」「太郎は財布を落した」等も存現文と見なすべきである。また, 「太郎は涙を零した」「太郎は喉を哽らした」「太郎は髭を伸ばした」等は“主体出現某物或某种状态”(主体にある物, あるいはある状態が現れる)ことを表しており, 存現文と見なすべきである。また日本語には「太郎は家財道具を焼いた」のような文があり, 「状態変化主体の他動詞文」と呼ばれる(佐藤2005:86)<sup>5)</sup>。

ここで注意すべきは「太郎」が動作の主体から変化の主体に拡張するという点である。この意味機能の拡張はメトニミーによって実現したのである。つまり, 家財道具は「太郎」の所有物であり, 所有物は主体を代表するというメトニミーのメカニズムによって, 「家財道具」の状態変化は「太郎」の状態変化を表すことになる。よって主体「太郎」は〈動作主体→変化主体〉の意味拡張が実現したのである。「太郎は腹を壊した」「太郎は前歯を折った」「太郎は足を冷やした」等も同様に理解することができる。そして, これらの〈SOをV〉他動詞文は〈動作主体→変化主体〉の意味拡張に伴い, 文全体も〈他動性→自動性〉の意味拡張が実現された。これらの文の〈他動性→自動性〉の意味拡張が実現できる条件はすべてOがSの付属物であり, 主体がメトニミーによって変化主体に変わるのである。ここで考えるべきことは「太郎は前歯を折った」が自動性に拡張できるとすれば, それが「太郎は前歯

が折れた」とどういふ違いがあるのかということである。「太郎は前歯が折れた」は「太郎」が「前歯が折れた」状態にあることを表すが、「太郎は前歯を折った」は「太郎」は影響を受け、損失を被ることを表す。影響性は2.1の他動性定義についてのところで言及したが、これは他動性程度の高低を判断するパラメーターの一つである。つまり、「太郎は前歯を折った」のような表現は影響性を表す以上、他動性を含意することになり、この他動性的意味は主に「を」によって表される。ゆえに、「を」は自動性の表現では他動性の残りが残っていると言える。同時に格助詞「を」は他動性と自動性の連続性を反映していると言える。これに対し、中国語の他動性と自動性の連続性は例(14)から分かるように、〈SVO〉に反映している。

認知言語学では客観世界で起きた出来事は「イベント構造」(event structure)と呼ばれ、それは「因果連鎖」(action chain)の認知モデルで表される。因果関係の行為(使役行為)のプロトタイプは〈意図〉+〈行為〉+〈結果〉+〈責任〉等の要素からなっている(中右・西村1998:127)<sup>7)</sup>。ここでは因果連鎖の認知モデルは様々な側面があると考えられる。その中で、「行為」という側面が強調される時、〈意図〉〈行為〉〈有生〉〈動態〉等の要素が焦点となるが、「結果」という側面が強調される時、〈状態〉〈変化〉〈責任〉〈静態〉等の要素が焦点となる。「イベント構造」はこのような様々な側面があってこそ、意味拡張が実現できるのである。「太郎は家財道具を焼いた」のような表現は〈他動性〉〈意図〉〈行為〉の側面もあれば、〈自動性〉〈状態〉〈変化〉の側面もある。これも「イベント構造」に多様な側面があることの現れであると思われる。

中日対照の立場から見れば、中国語の〈SVO〉構造と日本語の〈SOをV〉構造のプロトタイプの意味は〈他動性〉の「イベント構造」を表すものであり、メタファーやメトニミー等の意味拡張のメカニズムで他動性は自動性に拡張するのである。中国語と日本語の違いは主に形式が異なるところにある。中国語は主に構造と位置によって〈他動性→自動性〉の意味拡張を表すのに対し、日本語は主に格助詞「を」によってそれを表す。つまり、日本語の「を」格助詞は〈他動性→自動性〉の意味拡張を明確に表しているといえることができる。これは「山田さんは家を建てた」、「太郎は前歯を折った」のような文は他動性と自動性の両面を含意することからも見てとれる。

#### 4. 終わりに

本稿は構文文法の理論に基づいて中国語と日本語を対照する立場で構文の他動性について考察し、その結果を以下のようにまとめることができる。

中国語も日本語も構文の意味は連続性があり、拡張することができる。存現文は領属文に拡張できるし、領属文は他動詞文に拡張できる。意味拡張は概念のつながりに基づいて実現する。具体と抽象、動態と静態、原因と結果及び他動性と自動性はそれぞれ連続し、拡張できる。意味拡張のルートは通常〈動態→静態〉〈原因→結果〉〈具体→抽象〉〈他動性→自動性〉となり、これは認知の規則に合致する。

中日対照の立場から見れば中国語の〈SVO〉構造と日本語の〈SOをV〉構造のプロトタイプの意味は他動性の「イベント構造」を表すものであり、メタファーやメトニミー等の意味拡張のメカニズムで構文は〈他動性→自動性〉の意味拡張が実現できる。中国語と日本語の違いは主に中国語は構造と位置によって他動性・自動性を区別するが、日本語は格助詞「を」によってそれを区別する。

#### 参考文献

- 1) 陆俭明2004.“构式语法”理论与汉语研究 [J]. 中国语文.
- 2) ウェスリー・M・ヤコブセン.1989.日本語学の新展開 [M].くろしお出版.
- 3) Hopper and Thompson .1980. Transitivity in grammar and discourse, Language Vol.56, No.2.
- 4) 任 鷹.2009.“领属”与“存现”:从概念的关联到构式的关联 [J].世界汉语教学308-20.
- 5) 佐藤琢三.2005.自動詞文と他動詞文の意味論 [M]. 笠間書院.
- 6) 寺村秀夫.1982.日本語のシンタクスと意味 I [M]. くろしお出版.
- 7) 中右実・西村義樹1998.『構文と事象構造』[M]. 研究社.

Received date 2019年9月3日

Accepted date 2020年1月30日